

[特集2]

[特集1]

聞 語

巨大な野外劇場が語った二十世紀のアジア

「維新派犬島公演」喝采の中で終演

瀬戸内国際芸術祭参加アーティストに

宇野港に巨大オブジェ「チヌ」を制作した淀川テクニク

★維新派と過ごしたこえび隊の夏

★アートをめぐる・連続シンポジウム開催

く る



巨大な野外劇場が

— 維新派犬島公演 —

喝采の中で終演

瀬戸内国際芸術祭のオープニングを飾る劇団「維新派」の2010年の公演が、この夏、岡山市東区犬島のアートプロジェクト「精錬所」美術館の広場で開催された。

タイトルは、フランスの詩人「ジュール・シベルヴィエル」の詩の一節からヒントを得た「台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき」。

“大陸から多く語られてきたアジアを海からの視点で捉え、そこに存在する「海の道」を20世紀という時代の中で可視化したい”という松本雄吉主宰の挑戦である。そのためにはアジアの多島海をイメージする島々の形、瀬戸内海から東南アジアに続く海の道をイメージする形、そして20世紀の或る時間、つまり“台湾の、灰色の牛が背のびをした”そのとき、アジアの各地で展開された人間の営みを並列に並べる空間が必要であった。そしてそのイメージを現実化させるために、丸太4000本近く、踏み板1000枚余りを要す巨大な野外劇場が約1週間で築かれた。丸太の搬入など準備期間を含めると約2ヶ月。役者、スタッフなど公演に係わった人数約90人。公演は12回。喝采の中で幕を閉じた。

公演が終わったあと、あの賑わった劇場は強い日差しに晒されるがらんとした広場に戻った。吹き抜ける潮風、星の瞬く舞台上で展開された20世紀のアジアの物語、役者やスタッフの汗と息使いが、まるで真夏の夜の幻のように消えていた。

今回の公演は、維新派が激動の20世紀をテーマに2007年から取り組んだ三部作の最終章。

第1章「nostalgia」は、ブラジル移民の夢、希望、挫折、絶望を描く。そこに身長4mもの肥大化した＜彼＞を登場させる。彼は一言も発することなく、20世紀初頭の人間の怒りと悲しみを静かに見守る。それはやがて更なる人間の怒りと悲しみの世紀末が訪れることを予感させる。

第2章「呼吸機械」は第二次世界大戦の引き金となるポーランドが舞台。ナチス・ドイツと旧ソ連の侵攻によって分断されるポーランド。アウシュビッツに代表される強制収容所の悲劇、カチンの森事件として知られる2万5000人もの虐殺という二重三重の受難に見舞われる。物語は、戦後旧ソ連によって誕生する共産党政権下で、党の幹部に仕える兄と反共のテロリストになる弟の宿命的な生き方を描く。ラストシーンで20mにも肥大化する＜彼＞は、人間の織り成す愚かな行為を静かに見守り、琵琶湖に特設された湖上舞台の沖を漂っていく。何も語らない＜彼＞。すべては人間の強欲さと残酷さに起因していることを暗示して…。

第3章にも＜彼＞は登場する。これまでの人間の営みを静かに見守ってきた＜彼＞は鉄兜を被り、銃を肩にする能動的な＜彼＞に変身していた。それは“人間はいつまで愚かな行為を続けるのか！”20世紀を漂浪してきた＜彼＞の怒りでもあったのか。最終章は、12月にさいたま劇場で、来年8月にはイギリスのエジンバラでも上演され、新たな衝撃を与えることになるだろう。

20世紀のアジア





淀川テクニック

Yodogawa-Technique

地元岡山での作品発表は、初めてでしょうか？2008年に倉敷芸術科学大学の生徒さんたちとワークショップをやったことがあるので岡山のゴミで作品を作るのは2回目です。その時は花輪を作りました。浅口市というところの海ゴミを使って作品を制作したのですが、テトラポットの間に物凄い量のゴミを発見して小躍りしたのを覚えています。宇野についての印象を聞かせてください。高校生の時に部活の合宿で近くの玉野市スポーツセンターという所によく来ていて岩山の印象が強かったのですが、今回は高松から毎日フェリーに乗って宇野港まで通っていたので海と島のイメージが定着しました。ゴミで作品を作るようになった切っ掛けは何ですか？一番最初は低コストということで目を付けましたが、そのうち作品をつくる過程で、ゴミがゴミでなくなる瞬間が凄く楽しくて癖になってしまいました。小さい頃からいろんなモノを拾ってきては、何だろとワクワクしてました。今回のチヌは大作としては4作目になります。全長は6m位で、軽トラック山盛り2台分のゴミを使用しました。今回作品のテーマは何ですか？カラフルにいこう！です。実はレインボーカラーは凄く贅沢なゴミの使い方で、大きな作品でこの色使いはなかなかできないんです！集まるゴミの量がポイントになるのですが、今回ゴミを集めてみると凄く大量にあったので、フェリーに乗っている人からも目につくし「こりゃいけるな！」と思って決めました。今回は、どちらで材料を集められましたか？毎回ゴミを集める場所と量は作品の出来を左右するのでとても重要なのですが、地元の方にゴミが沢山

聞

宇野港（玉野市）に巨大オブジェ「チヌ」を制作された淀川テクニックの柴田英昭さん（岡山県真庭市出身）に制作の話や瀬戸内海について語っていただきました。

瀬戸内国際芸術祭参加アーティストに



落ちている場所を聞いても知らない場合が多いので、大体事前に下見をしてゴミポイントを探します。今回は主に児島湖とそこに流れ込む川べりに沢山ゴミが落ちていました。清港会から海で収集されたゴミも分けていただきました。淀川のゴミとの違いはありましたか？ゴミの量自体も多かったのですが……。淀川と比べて鉢が異常に沢山あったので、岡山の人は植物を育てるのが好きなんだな～と思いました。今回の作品づくりのご苦労は？日影が全然ない所だったので、カンカン照りでも逆に雨が降っても作業がとても辛いので「曇ってくれ！」と願いながら作品を作っていました。作業を終え、帰りのフェリーでお風呂に入るのが一番の楽しみでした！インドネシアでは作品のアロワナが川下りをしていましたが、今回のチヌは瀬戸内海を泳ぐ予定はないのでしょうか？フェリーの甲板に載せて瀬戸内海めぐりをさせたいです！地元岡山に対する思い、瀬戸内国際芸術祭に対する思いを教えてください。昔は岡山弁があまり好きではなかったのですが……地元の言葉はやっぱりいいもんですね。それと世界からお客さんがくる瀬戸内国際芸術祭ってやっぱり凄いです。勿論見どころはアートなんですけどそれだけではない魅力がありますね。是非、たくさんの方に訪れていただきたいです！



★淀川テクニック プロフィール★

2003年に結成、柴田英昭さん（岡山県真庭市出身）と松永和也さん（熊本県八代市出身）によるアートユニット。淀川（大阪）の漂流物や河川敷に落ちているゴミなどを組み合わせて作る遊び心あふれる作品が特徴で、国際的な展覧会で高い評価を受けている若手アーティスト。

2009年「第12回岡本太郎現代芸術賞」入選、「咲くやこの花賞」受賞

淀川テクニックの柴田英昭さん(右)と松永和也さん(左) [courtesy of YUKARI ART CONTEMPORARY]

アートをめぐる 連続シンポジウム 開催

高松港・宇野港と周辺7島で国内外75組のアーティストによる現代アート作品を展示する「瀬戸内国際芸術祭2010」が19日に開幕、10月31日までの105日間、開催されます。そのキックオフイベントとして、アートをめぐる・連続シンポジウムの第1回『美術とキュレーション、その仕事』が7月4日、岡山国際交流センターで開催されました。シンポジウムは、日本や世界各地の芸術祭を見てきた大西若人氏を司会に迎え、パネリストに犬島で「家プロジェクト」を手掛けた妹島和世氏、長谷川祐子氏、柳幸典氏と総合ディレクターの北川フラム氏を交え、それぞれの立場からアートの可能性やキュレーター(展覧会企画者)の役割について意見交換しました。



大西若人氏 (朝日新聞編集委員)



妹島和世氏 (建築家)

長谷川祐子氏
(東京都現代美術館チーフキュレーター)

柳幸典氏 (アーティスト)



北川フラム氏 (アートディレクター)

夢見られる場所を

打ち返す面白さ

犬島の風景に魅了

答えは犬島で

←当日チラシをみんなで準備

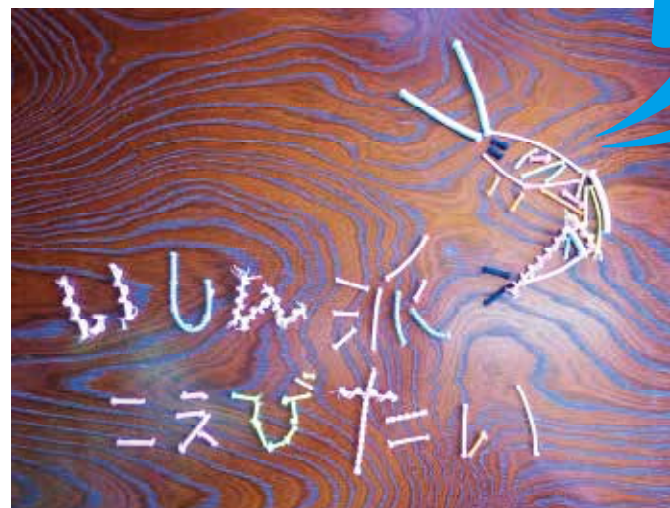


瀬戸内国際芸術祭のボランティアサポーター・こえび隊。維新派を支えるこえび隊を「維新派こえび」と呼ぶ。
維新派の人たちが犬島で生活を始めたのが6月20日のこと。その少し前から維新派こえびの活動は始まる。公演チラシの発送手伝い、島の方たちとの犬島清掃、維新派の人たちが生活する空家掃除。

維新派こえびには色んな人がいる。この芸術祭で初めて維新派を知り興味を持った人、犬島なら近いから参加しているという人、維新派が好きで犬島と一緒に生活しながら手伝いに来た人。維新派への思いと同じく、こえび隊として活動する思いや理由も人それぞれ。だということが一緒に活動し、話をしてみてわかった。

犬島での作業が始まる。野外劇場がすごいスピードでできあがる。強い日差しの中で作業し、夜は稽古という毎日を送る維新派の人たち。その作業ぶりとエネルギーに驚いた。
その横で維新派こえびは小道具のペンキ塗り、飯場で60人分のまかない補助、衣装作りを手伝った。維新派・犬島公演のPR映像も作り、芸術祭や維新派の公演を知ってもらうために岡山のまちを回った。

夏 こえび隊の 維新派と過ごした



8月1日、維新派の犬島公演は千秋楽を迎えた。上演前にはいつも、役者、小道具、音響など公演に携わる人たちが舞台に集まり、その日の無事を祈願する。千秋楽のこの日、初めて維新派こえびもその輪に加わった。

最後となる12回目の公演が終わり、帰りの船へとお客さんを誘導し、舞台の後片付けをする。帰り際、制作の方から維新派こえび一人ひとりの名前が直筆で書かれた大入り袋が手渡された。5月の岡山こえびミーティングで、「関わってくれる皆さんを維新派のメンバーとして迎えしますよ」と語りかけてくれた言葉を思い出した。

舞台からかすかに聞こえてくる音楽と役者の声。見えるのは野外劇場の灯りと精錬所の煙突と星空。維新派と過ごす時間の中で、犬島と維新派に魅了され変わっていった維新派こえび。維新派をきっかけに犬島で生まれたこの夏の出来事。こえび隊として瀬戸内国際芸術祭に関わる。どこか別の島でも、今もこれからもこんなかけがえのない出会いがきつと起こっている。

こえび隊 金田崇男(岡山市在住)

★こえび隊活動歴★

昨年12月、高松でのこえび勉強会に初参加し、以後31回公式な活動に参加。うち維新派こえびの活動は14回を数える。

上演前にこえび隊も集合！→



「維新派 犬島公演」青地大輔



＜彼＞と旅をする20世紀三部作と題し、第一部「nostalgia」、第二部「呼吸機械」を上演してきた維新派が、第三部「台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき」を犬島で公演した。2002年の犬島アーツフェスティバルで行われた「カンカラ」以来の2度目の犬島野外公演だ。

今回の舞台は約4000本の丸太と、約1000枚の足場板を使用し、上空から見ると巨大なトカゲを模している。もちろん背景には精錬所の煙突がそびえ立つ。夕方、太陽が傾き始める頃に開演した舞台は空の変化とともにドラマチックに変化していった。その舞台では、いくつもの島での異なった時代背景のストーリーが並行して語られた。それはまるで瀬戸内国際芸術祭の会場となっている島々の、その島ひとつひとつの積み重なった歴史を踏まえた作品が展示されているように、

「海」というキーワードのもとにつながっていくように感じられた。台詞の一節に「ここからここまで、いっけんにけん。ここからここまで、さんけんよんけん。」とある。どの島にも、そこに住むすべての人に、その人のいっけん、にけんと歩んできたストーリーがある。

また、それは「海」という媒介を通じ、時間さえも超えて繋がっていくことを示すかのように感じる。谷川俊太郎は「朝のリレー」で僕たち（生き物）は朝を順番にリレーしていく、と表現しているが、いわば今回の舞台は「海のリレー」なのかもしれない。「海」が時代を超えて国を越えて繋がっているのだ。

Editor's comments

7月20日から始まった犬島での維新派公演は、天候にも恵まれ、事故もなく無事に楽日を迎えることができました。ご協力、ご支援をいただいた皆様、また観劇してくださった皆様、こえび隊の皆様のおかげだと主催者一同、感謝しております。

7月25日に行われた教育関係贈呈式で宮野常任理事が「汗水たらし、一生懸命働いている維新派の劇団員の姿を目の当たりにした時、目的や夢を持っている若者の強さ、たくましさを感じた」と言われていた言葉に共感した人は私だけではないでしょう。

維新派公演は、壮大な野外劇場や併設された屋台村、そこに集まる人々……その光景は、まさに祭りそのものでした。それだけに更地になった跡地に立つと、祭りの後の寂しさを感じました。

瀬戸内国際芸術祭は、10月31日まで続きます。ひとりでも多くの方に、ひとつでも多くの島を体験していただければ幸いです。

季刊

不易

F U E K I vol.39 2010.8.31

編集・発行：

財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
URL <http://www.fukutake.or.jp/>
E-mail eczaidan@fukutake.or.jp

制作：
株式会社 吉備人
デザイン：
田中雄一郎(QUA DESIGN style)
印刷：
広和印刷株式会社



人づくり、地域づくりを応援します

財団法人 福武教育文化振興財団